

感覚環境のモノサシをまちづくりに織り込むために

“いい感じ” の まちづくり

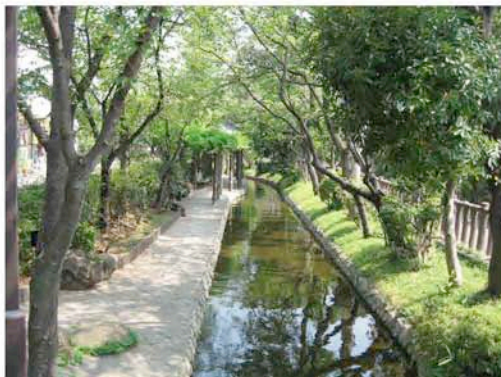
"いい感じ"が 感覚環境の モノサシ

理由はわからないけど、なんだかちよつと“いい感じ”。ふとした瞬間、あなたが感じた心地良さ。それを感覚環境^{※1}のモノサシにします。

※1：感覚環境

外界からの刺激を目・耳・鼻・口・肌などの感覚器官で感じる働きと、それによって起こる意識が感覚です。視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五感の他に、温覚・冷覚・痛覚などがあります。こうした、モノ・カタチにならない人間の感覚により認識される環境を感覚環境といいます。

感覚は環境を知るセンサー



水辺をそぞろ歩いていると、水面にきらきらと反射する光、頬を優しくなでる風に爽やかな心地よさを感じ、また土手の草原に座れば、穏やかなせせらぎと太陽のぬくもり、そしてほのかに漂ってくる花のかおりにほっと人心地がつく——「きらきら反射する光」は目から、「せせらぎ」は耳から、「太陽のぬくもり」は肌で、「花のかおり」は鼻で感じています。

このように、人がまわりを認識するときには、音、かおり、光、ねつなどを体全体の様々な感覚で感じ取っていますが、私たちは普段、こうした様々な環境に取り巻かれながらも、とりたてて意識することもなく暮らしています。

感覚環境のモノサシを使う

音・かおり・光・ねつといった感覚環境は、私たちの暮らしに、どのような影響を与えているのでしょうか。

感覚環境は移ろい、変化しながら、その場、その時でしか味わえない空間を演出します。さらに、光や音、かおり、風などをきっかけとして、かけがえのない思い出がふと蘇ってくることもあります。音・かおり・光・ねつから、季節や時代の移り変わり、そのまちの個性やそのまちならではの雰囲気といったものが思い起こされます。

普段何気なく感じているこれらの感覚が、より良く、より豊かに暮らしていくための重要な役割をもっていることに気づくこと、そして、“いい感じ”かどうか評価すること、感覚環境のモノサシをうまく使うことが大切です。このよ

うなことを通し、より深く地域の魅力や特性を捉え、次世代へと伝えていくことが必要です。



いい感じ



いやな感じ

"いい感じ"を まちづくりに いかす

みんなに共通する“感覚のモノサシ”をそれぞれのまちでつくりあげていくことが、“いい感じ”をまちづくりにいかす第一歩です。

感覚環境のモノサシをまちづくりにいかす

感覚環境のモノサシをまちづくりにいかす段階には、「みつける」「つなげる」「うごく」の3つがあります。

みつける

意識してまちを歩き、まちの“いい感じ”を発見します。普段、無意識に接してきた暮らしの中の音・かおり・光・ねつに注意を払い、時間による移ろいや相乗効果についても考えてみましょう。日常のちょっとした気づきの積み重ねが、あなたの中の“いい感じ”のモノサシを呼び覚まします。

つなげる

みつけた感覚環境を、まちのみんなとわかちあいます。同じ感覚刺激でも人により感じ方は様々ですが、互いの感覚をつないで共通の“感覚環境のモノサシ”をつくっていきましょう。“いい感じ”の共感がまちへの思いと目標の共有を促すほか、その過程がまちの魅力の再発見を助け、まちへの愛着や誇りを育みます。

うごく

“感覚環境のモノサシ”を使って、みんなで共有した“いい感じ”のまちをこれからも残していきます。“いい感じ”のまちを広めたり、訪れたり、より良いものにするためにひとりひとりが活動します。また、“感覚環境のモノサシ”を使い、感覚環境の視点からまちを見直す機会も設けていきます。

